嵐山

禅鳳作

前

ワキ　勅使

シテ　花守の翁

ツレ　里女

後

ツレ　勝手明神

ツレ　子守明神

シテ　蔵王権現

地は　山城

季は　三月

ワキ次第「吉野の花の種とりし。〳〵。嵐の山に急がん。

詞「抑是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても和州吉野の千本の桜は。聞しめし及ばれたる名花なれども。円満十里の外なれば。花見の御幸かなひ給はず。去るにより千本の桜を嵐山にうつしおかれて候ふ間。此春の花を見て参れとの宣旨を蒙り。唯今嵐山へと急ぎ候。

道行「都には。げにも嵐の山桜。〳〵。千本の種はこれ

ぞとて。尋ねて今ぞ三吉野の。花は雲かと詠めける。其歌人の名残ぞと。よそ目になれば猶しもの。詠め妙なるけしきかな。〳〵。

詞「急ぎ候ふ程に。是は早嵐山に着きて候。心しづかに花を詠めうずるにて候。

シテ、ツレ一声「花守の。住むや嵐の山桜。雲も上なき梢かな。

ツレ「千本に咲ける種なれや。

二人「春も久しきけしきかな。

シテサシ「是は此嵐山の花を守る。夫婦の者にて候ふなり。

二人「夫れ円満十里の外なれば。花見の御幸なきまゝに。

名におふ吉野の山桜。千本の花の種とりて。此嵐

山に植ゑ置かれ。後の世までの例とかや。是とて

も君の恵かな。

下歌「げに頼もしや御影山。治まる御代の春の空。

上歌「さも妙なれや九重の。〳〵。内外に通ふ花車。轅

も西にめぐる日の。影ゆく雲の嵐山。戸無瀬に落

つる白波も。散るかと見ゆる花の滝。盛久しき気

色かな。〳〵。

ワキ詞「不思議やな是なる老人を見れば。花に向ひ渇仰の

けしき見えたり。御事は如何なる人やらん。

シテ詞「さん候是は嵐山の花守にて候。又嵐山の千本の桜

は。皆神木にて候ふ程に。花に向ひ渇仰申し候。

ワキ「そも嵐山の千本の桜の。神木たるべき謂は如何に。

シテ「げに御不審は御理。名におふ吉野の千本の桜を。

うつし置かれし其故に。人こそ知らね折々は。木守勝手の神ともに。この花に影向なるものを。

ワキ「げにやさしもこそ厭ふ憂き名の嵐山。取りわき花の名所とは。何とて定め置きけるぞ。

シテ「それこそ猶も神慮なれ。名におふ花の奇特をも。顕はさんとの御恵。

二人「げに頼もしや御影山。靡き治まる三吉野の。神風あらばおのづから。名こそ嵐の山なりとも。

地「花はよも散らじ。風にも勝手木守とて。夫婦の神は我ぞかし。音高や嵐山。人にな知らせ給ひそ。

地「笙の岩屋の松風は。〳〵。実相の花盛。開くる法の声たてゝ。今は嵐の山桜。夏箕の川の水清く。真如の月の澄める世に。五濁の濁りありとても。流れは大井川。其水上はよも尽きじ。いざいざ花を守らうよ。〳〵。春の風は空に満ちて。〳〵。庭前の木を切るとも。神風にて吹きかへさば。妄

想の雲も晴れぬべし。千本の山桜。長閑けき嵐の山風は。吹くとも枝は鳴らさじ。此日もすでに呉竹の。夜の間を待たせ給ふべし。明日も三吉野の山桜。立ちくる雲にうち乗りて。夕陽残る西山や。南のかたに行きにけり。〳〵。（中入）

地「三吉野の。〳〵。千本の花の種植ゑて。嵐山あらたなる。神あそびぞめでたき。此神あそびぞめでたき。

ツレ二人「色々の。

地「色々の。花こそまじれ白雪の。子守勝手の。恵なれや松の色。

ツレ二人「青根が峰こゝに。

地「青根が峰こゝに。小倉山も見えたり。向ひは嵯峨の原。下は大井川の。岩根に波かゝる。亀山も見えたり。万代と。〳〵。囃せ〳〵神あそび。千早ぶる。（ツレ二人舞）

地「神楽の鼓声澄みて。〳〵。羅綾の袂を飄し飄す。舞楽の秘曲も度重なりて。感応肝に銘ずる折から。不思議や南の方より吹きくる風の。異香薫じて瑞雲たなびき。金色の光りかゝやきわたるは。蔵王権現の来現かや。

地「和光利物の御姿。〳〵。

シテ「我本覚の都を出でゝ。分段同語の塵に交はり。

地「金胎両部の一足をひつさげ。

シテ「悪業の衆生の苦患を助け。

地「さて又虚空に御手を上げては。

シテ「忽ち苦海の煩悩を払ひ。

地「悪魔降伏の青蓮のまなじりに。光明を放つて国土を照らし。衆生を守る誓ひを顕はし。子守勝手蔵王権現。同体異名の姿を見せて。おの〳〵嵐の山に攀ぢのぼり。花に戯れ梢に翔つて。さながらこゝも金の峰の。光りも輝く千本の桜。光りも輝

く千本の桜の。　栄ゆく春こそ久しけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著